

修士論文（要旨）

2018年1月

日本語学習者の学習リソースの利用と動機づけとの関連についての考察

指導 齋藤 伸子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

216J3007

劉 芮君

Master's Thesis(Abstract)
January 2018

The Relationship between Japanese Learners' Resource-based Approaches and
Motivation

LIU RUIJUN

216J007

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

第1章 研究背景.....	1
第2章 研究目的.....	2
第3章 先行研究.....	2
3.1 学習者と学習環境との相互作用	2
3.1.1 リソースの定義	2
3.1.2 同心円図	2
3.2 有機統合理論	3
3.3 学習動機尺度	5
第4章 調査.....	6
4.1 予備調査	6
4.1.1 調査概要	6
4.1.2 調査結果	6
4.1.3 結果の分析	7
4.2 本調査	7
4.2.1 調査概要	7
第5章 分析.....	8
5.1 分析の概要	8
5.2 インタビュー分析	8
5.2.1 取り入れ的調整の協力者	9
5.2.2 同一化的調整の協力者	10
5.2.3 内的調整の協力者	14
5.3 同心円図の分析	15
5.3.1 1年生の同心円図.....	15
5.3.2 4年生の同心円図.....	21
5.3.3 大学院生の同心円図	28
第6章 考察	37
6.1 学年別の考察	37
6.1.1 大学1年生	37
6.1.2 大学4年生	38
6.1.3 大学院生	40
6.1.4 学年別の考察のまとめ	40
6.2 動機づけ別の考察	42
6.3 総合的な考察	44
第7章 まとめと今後の課題	45
7.1 研究の概要	45
7.2 考察のまとめ	46
7.3 今後の課題	47
参考文献	
付録	

要旨

近年、日本語教育分野では、学習者の多様化はもはや新しい問題ではない（浜田他, 2006）。学習者の多様なニーズと学習過程の個別性に合わせるために、日本語知識を伝授することだけではなく、教師に対する要求が高くなっていく。個々の学習者の個別性に対応しながら学習効果をあげるために、学習者自身が学習の主体となり、さまざまなリソースを利用して学習活動を行う自律学習が今後さらに重視されると稿者は考える。

一方、自律学習を実現するために欠かせないものは、リソースを利用して、学習活動を自分でコントロールする能力である。本研究は中国人の日本語学習者を対象にして、彼らが学習活動をいかにコントロールするかと、その要因を明らかにすることを目的としたものである。

そのために、予備調査と本調査の2つを実施した。予備調査はアンケート調査で、中国の某大学の日本語学部の1年生30名と4年生30名、日本に留学している大学院生30名、合わせて90名の日本語学習者の協力を得て、彼らにアンケートを行い、有機統合理論による動機付け尺度を用いて動機づけの段階を明らかにした。次に本調査として、予備調査の協力者より学年別に抽出した7名に、日本語学習リソースの利用状況を反映する同心円図を描いてもらい、その図を参照しながらインタビューを行って、各リソースに対する評価を聞いた。

調査の結果、1年生と大学院生の協力者は、同一化的調整の動機づけを持っている人が多いが、学習活動の中で、自律的に学習する程度が違うことがわかった。4年生の協力者は取入的調整、同一化的調整、内的調整の動機づけを持っている人がほぼ同じであるが、リソース利用からみる学習活動の自律性は同程度であることがわかり、動機づけと学習活動との間の関連性はみられなかった。また、人間の基本の3つの心理欲求を基にして分析を試みた。その結果、3つの心理的欲求が満たされることが自律的な学習活動に結びつくこと、外発的動機づけの学習者でもリソースを積極的に使って自律的に学習活動を行うことがわかった。

2つの調査から浮かび上がってくる学習者像から、3つの心理的欲求が満たされることが重要であること、関係性は日本語学習の最初の段階でもっとも影響がうかがわれやすいことがわかった。さらに、動機づけの自己決定性にかかわらず、外発的学習動機づけを持っている学習者でも自律的に学習活動を行うことが期待できることがわかった。

参考文献

- 青木直子・中田賀之(2011)『学習者オートノミー—日本語教育と外国語教育の未来のために』ひつじ書房 pp.1-19.
- 磯田貴道(2005)「学習意欲や動機づけに関する概念の整理へ向けて」『広島外国語教育研究』広島大学外国語教育研究センター、第8号 pp.85-95.
- 梅田康子(2005)「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割—学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る」『言語と文化』愛知大学語学教育研究室、39巻12号 pp.59-77.
- 大西由美(2014)「日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究：日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に」北海道大学博士学位論文 pp.14-20.
- オレック, アンリ (2011)「言語学習におけるオートノミー」『学習者オートノミー』ひつじ書房 pp.30-38.
- 上淵寿(2004)『動機づけ研究の再前線』北大路書房 20-60.
- 工藤節子(2006)「台湾の日本語学習者の学習リソース利用—インタビュー調査から—」『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』pp.83-103.
- 国際交流基金(2017)『海外の日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査より』pp.7-13.
- 西條剛央(2007)『ライブ講義・質的研究とは何か (SCQM ベーシック編)』新曜社 pp.151-173.
- 櫻井茂男(2012)「夢や目標をもって生きよう！自己決定理論」『モチベーションをまなぶ 12 の理論』金剛出版 pp.45-63.
- 田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発』pp.44-49.
- デシ・L・エドワード、フラスト・リチャード(2009)『人を伸ばす力—内発と自律のすすめ』櫻井茂男(訳)新曜社.
- 西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男(2011)「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス:—内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか?—」『教育心理学研究』59巻1号 pp.77-87.
- 白頭宏美・久保田美映(2010)「自律的な学習に向けた自己分析作業:自己評価と振り返り」『桜美林言語教育論業6』pp.77-90.
- 浜田他(2006)「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』pp.67-96.
- 林さと子他(2006)『第二言語学習と個別性』春風社.
- 廣森友人(2006)『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版.
- 藤田裕子(2014)「日本語上級学習者の自律性を高めるための授業活動の効果と課題」『桜美林言語教育論業10』pp.103-118.
- 藤原三枝子(2012)「自己決定理論に基づく第二言語習得研究の動機づけ研究」『南山言語科学7』pp.17-32.
- 藤田ラウンド幸世(2006)「学習者オートノミーを意識した学習環境作り—自律性を育むチュートリアルと日本語学習リソースセンターの役割とは」『桜美林言語教育論業2』pp.89-104.
- 文野峯子(2004)「研究成果報告書」『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』pp.1-25.
- 屋島智子(2004)『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部.

- 山口剛(2012)「動機づけの変遷と近年の動向ー達成目標理論と自己決定理論に注目してー」『法政大学大学院紀要』第 69 号 pp.21-38.
- 李徳奉(2006)「日本語教育を活かすためのリソース・リテラシー」『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 海外調査報告書』国立国語研究所 pp.171-178.
- Deci. L. Edward & Ryan. M. Richard (1985) *The general causality orientations scale: Self-determination in personality*. New York: Journal of Research in Personality pp.109-134.
- Edward L. Deci & Richard Flaste (1996) *Why We Do What We Do: Understanding Self-Motivation*. London:Penguin Books.
- Edward L. Deci & Richard M. Ryan (2011) *Handbook of Theories of Social Psychology: Volume One*. Thousand Oaks: SAGE Publications Ltd pp.416-437.